



Emile H. Ishida

「ネイチャー・テクノロジーを考える」

東北大学 石田秀輝

サブプライムローンに端を発した経済危機は、新しい年を越しても益々拡大を続け、残念ながら、虚の経済の上に社会構造が立脚していたことを目の当たりに見せてくれている。多くの経営者が、「ピンチをチャンスに！！」と発言しているが、何がピンチで、何がチャンスなのか、極めて曖昧で、自らを鼓舞しているようにしか聴こえないことも多い。確かに、企業経営を考えると短期的には現在の社会システムでものを考えざるを得ず、長期的には、大きく舵を切ろうとしてもどちらへ切れば良いのか不明確で、新しい航路に必要な社会システムが整っては居らず、特に現在の状況では大きく舵をきるための資金調達も容易ではない。本来、今こそ大所高所に立って政治が主導しなくてはならないはずであるが、100年、1000年の計を期待できるレベルにはない。

少なくとも物質的、経済的な拡大だけを追ってしまった結果が現在の問題を引き起こし、今こそ、「最少の地球環境負荷で心豊かに暮らす」ための新しいテクノロジーの創出が望まれているのだと思う。文化は人の叡智に帰属し、文明はテクノロジーの集積であることを思えば、新しいテクノロジーの創出とは、新しい文明創出を意味するのだと思う。それだけの大きな変化を生み出さねばならないのである。

そもそも、「人にとっての地球環境問題とは何なのか?」「地球環境問題は どうしては起こったのだろうか?」「テクノロジーはこの問題に貢献できるのだろうか?」「貢献できるとすればそれはどんなテクノロジーなのだろうか?」「そのテクノロジーは、生きることを楽しんで暮らすという人間の本质にも貢献できるのだろうか?」……その答えは、江戸の粋の文化をテクノロジーに写すこと、テクノロジーに自然観を取り戻すことではないかと思っている。我々はこのようなテクノロジーを「ネイチャー・テクノロジー」と呼ぶことにした。2009年1月これらの問題を整理し、「自然に学ぶ粋なテクノロジー」(化学同人)として上梓した。



<総説・論文> 25 報

<報道> 37 回

<国際会議招待・基調講演> 8 回

<講演> 31 回(学会発表を除く)

石田秀輝 Emile H. Ishida 東北大学大学院環境科学研究科 <環境創成計画学講座>

〒980-8579 仙台市青葉区荒巻字青葉 6-6-20

Tel & Fax: 022-795-4398

Tel & Fax: 022-795-7409

e-mail: emile.h.ishida@mail.kankyo.tohoku.ac.jp

石田研 <http://ehp.kankyo.tohoku.ac.jp/ishida/>

人材養成ユニット <http://www.semsaf.jp/>

すごい自然のSR <http://www.nature-sugoi.net/>

環境科学研究科 <http://www.kankyo.tohoku.ac.jp/>